



# 建設の幻獣1 レヴェエラーほか

**はじめに**  
建設に関する伝説には、いろいろな幻獣が登場します。だれもが知っている鬼や河童なども、伝説の中では用水路を造ったり、階段を造ったり、堤防を造ったり、さまざまな建設活動を行っています。今回から、おりおり何回かにわけて、そういった「建設の幻獣」たちを紹介していきます。と思っています。

また本稿でいう「幻獣」とは、空想上の動物、妖怪などに加えて、神や仙人や聖人など人の姿でありながらも超越的な力を持つとされる存在も含めています。

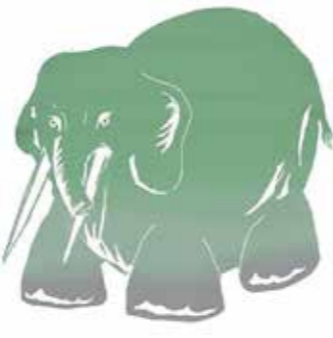
**レヴェエラー**  
アルゼンチン出身の作家ホルヘ・ルイス・ボルヘス(1899-1986)の『幻獣辞典』に、「地面を均すもの・Bodendrucker」として、レヴェエラーが紹介されています。

ボルヘスは幻想的な短編作品で知られ、翻訳と解説を担当した柳瀬尚紀は彼について「この書淫の怪物は常に図書館に住み、ありとあらゆる類の書物を貪り食

い、それをことごとく記憶の胃液にとかして想像力の臓腑を養い、そしてめったに忘却の排泄をしない」と述べています。まるで、ボルヘス自身が幻獣のようです。

本書は、ボルヘスが中世ラテン語、フランス語、ドイツ語、イタリア語などなどの原著をくまなく渉猟して、他書では知りえない幻獣の数々が編まれており、平成27年(2015)には河出書房新社から文庫版も出版されています。

さて、レヴェエラーとは、1840年から1864年の間にバイエルンの音楽家である教師のヤコブ・ロールバールが、「光の父」から太陽系の天体の人類、動物、植物に関する一連の絶えまない信頼に足る啓示



レヴェエラー(当館職員 上原由子画)

に共通してみられるものである。奇怪な動物や人間の形をし、口から水を吐き出す」などがあります。

「レヴェエラーに共通するのは、いずれも雨水吐きの建築機能を持つことであり、ファンタジー世界の翼を持つ悪魔のような動く石像のイメージは、本来ではありません。

ただし、尾形希和子の『教会の怪物たち ロマネスクの図像学』によるとノートルダム大聖堂のガーゴイルの多くは、19世紀の修復の際に建築家ヴィオレ・レ・デュックらによって付け加えられたもので、雨樋の役割はなく純粋な彫刻として設えられているそうです。

**螭首**  
ガーゴイルと同じく、装飾と排水口を兼ねているのが中国の螭首です。楼慶西の『中国の建築装飾』から解説を引用してみます。

「重要な部分の高欄において、螭首は高欄親柱の下に置かれ、口に小さな穴を開けて基壇の上面につなぐことで、基壇上にたまった雨水を排出する役割をもつ。螭首は、龍の頭だけをもち、完全な龍のかたちをもたないため、龍そのものではなく、その家族としかならない。屋根の上にある正吻(大棟両端の飾り)・小獸と同様、龍の子供の1頭とみなされている。また、排水の役割から、水を好むという性格が与えられている」

**鴟尾**  
鴟尾は、鴟吻ともいい、瓦葺の大棟の両端に着けられる建築装飾であり、火

を得て知りえたミロン(海王星)の家畜のことです。

「象に酷似しているが、胴回りは十倍もあり、太い鼻は短かめで、牙はまっすぐで長い。皮は淡い緑色をしており、四足はピラミッド型で、蹄のところで驚くほど広がっている。そのピラミッドの頂点が胴体にピンでとめられたように見える。レヴェエラーは建築師や煉瓦工より先に建築現場でこぼこしたところへ連れていかれ、そこで蹄や鼻や牙を使って、地面を均したり固めたりする」

**羊**  
中国の河北省 石家荘市にある趙州橋は、浅い谷を越えるアーチ橋で、白い石肌がまばゆいばかりだといえます。現存する中国最古の橋で、6世紀から7世紀の隋の頃に時の名工李春、李通らによって架けられました。

しかし、伝説では魯班という人が架けたことになっています。この人物は春秋時代の工匠で、巧みな建築や出来そ伏のまじないでもあります。名古屋城で有名な鯨の原型です。

楼慶西の『中国の建築装飾』では以下のように説明されています。  
「二面の傾斜をもつ屋根でも、四面の傾斜をもつ屋根でも、正面と背面の屋根の交点には棟が生じる。正面に面しているため、これを正脊(大棟)と呼ぶ。大棟の左右両端は、ほかの方向の棟と交わり、ここに「正吻」を置く。(中略)古い文献の記載によると、前漢・太初元年(紀元前104)、柏梁台の宮殿が焼失したが、当時の人々は有効な防火の手立てをもっていなかった。そこで、海には鴟尾のような長い尾をもつ神魚がおり、尾を使って激しく水面を叩いて波を起し、雨を降らせて消火することができるという説話を巫師(シャーマン)から聞き、この神魚のかたちを屋根に置くことで火除けとした」

この鴟尾が、唐代末あたりから魚や鯨といった生々しい造形になったものを、螭吻といい、元代に建てられた紫禁城のものには龍を象り、鯨にだいぶ近づいています。

螭吻の形状については以下の通り。  
「全体的なかたちはほぼ方形で、龍頭は口を開いて棟を咬み、龍尾は外に翻って巻き込み、体の表面は魚の鱗文様で満ち、そして一頭の小さな龍がつく。背中には一本の剣が刺さり、背中の後方には小さな獣の頭がつく」

**久米仙人**  
久米仙人の話については、大小の変化を見せながら多くの説話集に取り上げ



チェンパ猫とキルケニー猫(出典:『幻獣辞典』ホルヘ・ルイス・ボルヘス著 晶文社 1974年初版 表紙より転載)



6世紀から7世紀に架けられた趙州橋は現存する中国最古の橋(中国 河北省石家荘市)

られています。今回は平安時代末期に成立した『今昔物語集』巻十二第二十四話から紹介します。

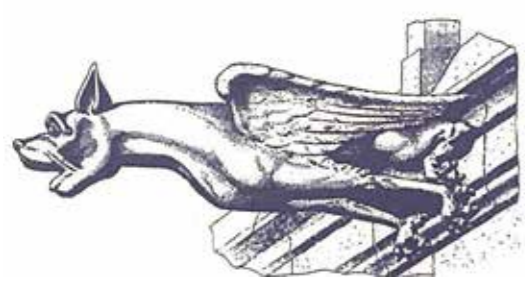
「大和国の吉野郡に龍門寺という寺があった。寺には安曇と久米という二人の仙人が修行しており、先に安曇が飛行術を身につけて空に昇り、後に久米もそれに続いた。

久米が空を飛んでいると、吉野川のほとりで、若い女が衣を洗っているのが見えた。まぐつた着物の裾から見える女の足は真っ白で、それを見た久米は欲情してしまい、とたんに仙術がかき消えて女の目の前に墜落してしまった。

その後、仙術を失った久米は、さきの女を妻にして暮らしていたが、天皇が高市郡(奈良県橿原市、藤原宮)に都を造るので、久米も人夫として労役に服することになった。ある時、他の人夫たちが久米のことを、「仙人、仙人」と呼んでいた。不審におもった役人が、そのわけを問うて経緯を知り、「仙人ならば手足で材木を運ぶより、仙術を使えばよいではないか」とからかった。

久米は静かな道場に籠って、身心を清浄にして食を断ち、七日七夜礼拝すると、八日目の朝に俄かに空が曇って雷雨となり、何も見えぬありさまとなった。しばらくすると、雲が晴れて来たので、皆が外に出てみると、大中小の材木が山から運ばれていた。役人たちは久米を敬つて拝礼し、天皇もそのことを聞き及んで、免田三十町を下賜されることとなり、そこからの収入で久米は久米寺を建立することとなった」(つづく)

(文:江口知秀)



ガーゴイル(出典:『世界の建築様式 歴史的古代建造物750の建築ディテール』エミリー・コール著 ガイアブックス 2009年 p.219より転載)

「橋が欲しいという人々の願いを受けて、魯班は大きな石のアーチ橋をつくることにした。しかし、巨石の採掘や運搬がままならない。すると、天の最高神の命を受けた神童が現れ、川の兩岸ぞいに羊の群れを橋の建築現場まで追立てた。現場についた羊たちは、ことごとく石材や橋面の石板、美しい彫刻の施された欄干の柱や飾り板などに姿を変え、橋は無事に完成した」

## ガーゴイル

「ガーゴイル Garroyle 中世建築において、軒先に取り付けられる雨水の落とし口、しばしばグロテスクな鳥獣として形づくられる」(彰国社 『建築大辞典 第2版』)

ガイアブックス『世界の建築様式 歴史的古代建造物750の建築ディテール』では、「ガーゴイル(極嘴) ガーゴイルは建物の屋根から突き出した動物の形をした吐水口で、すべてのゴシック様式